

加藤先生

本学会理事・委員長
國學院大學名誉教授

安津素彦

(遺稿)

。昭和の初期に、期せずして神道学界及研究者にとって決定的意味を有する二大書籍が両先生『加藤先生と佐伯有義國學院大學教授（六国史の校訂者として令名高く、『大日本神祇史』の好著ある）の御骨折りで、神道の書籍目録が公刊された。

。記紀等を始め、各時代の学派神道——外宮神道以下吉田・垂加・復古神道についての原典研究書の数量は極めて膨大で、書名をみたのみでは内容の判じ難いもの、又同名異書も多く且つ、該書の所在とても仲々突きとめがたい状態で、後進・浅学の研究者にとっては、以上の諸点を一応説明した両書は研究上に一大指針を得た想いであつた。

。小生が両書についてお手伝いしたのは、巻末に纏められた異邦人の神道論文及記紀等の所謂神典の英・独・仏訳等のリストの作成である。

。学生時代、異邦人の神道論について紹介又は研究しておられたのは加藤先生と文理大の補永茂助教位にすぎない。

。学生時代、助手の時代の小生にとっての唯一の関心事は、神道の本質論の究明にあつた。レヴィー・ブリュル等の影響もあり、日本人の古代思惟の究明によって、神道の核の理解は可能か、などと模索しつつ、古典に親しんでおつたので、所謂神道論、神道学者の説く観念的抽象的神道論には興味は薄かつた。

。とは申しても、異邦人の神道論及記紀の外国語訳のあつた以上、神道の研究者としては最低のそれらについての知識の取得は必要である。当時専門として研究せぬまでも、誰か必ずその仕事を引受ける若い研究者への橋渡しでもしようか、と考え、先ず最初に試みたのが「アーネスト・サトウの宣長論」(『道義論叢』第一輯)である。その

後、依頼により書き、最後には『異邦人の神道論』として公刊する(白帝社、昭和49年)。

扱て、先生に特に親しく接触し出した時点は定かではない。学生時代宗教学の講義受講がチャンスであった。小石川駕籠町の明治聖徳記念学会の事務所にお手伝いに出掛けた。当時東大助手溝口駒三氏、松下松平氏が務めておられた。松下氏は目下も健在で、旧事大成経の発刊に戦前にも増して努力せられている奇篤な学者の一人(國大神道部の卒業生)。

猶、一言加えておく。占領軍の当初の神道神社(國家神道)観は、ホルトムの著書であることは、軍が日本についてのガイド文の中の一冊にホルトムの神道論が含まれている点からも云える。

余談になるが、敗戦後、神社に対して占領軍は極めて、片手落ちの処置をとる、信教の自由は神社に限っては守られていない。

日光東照宮古川左京宮司はこの点をよみとり、小生を呼び、当時の神祇院の幹部諸君を明治神宮の絵画館の一

室でホルトムの神道観を話すよう乞われて、彼の神道論を陳べたことがある。

後日、先生の依頼で小野祖教氏と連立って横須賀基地に勤務のホルトム氏の子息に会って様子をきいたが判然とはしなかった。

加藤玄智先生の思い出

本学会理事
明治神宮権宮司 副島廣之

もう五十年以上も昔のことだから、國學院の神道部でどんな授業を受けたのか、すべて遠い記憶の中にあつて定かではない。和服をつけて登校した祭式、野外演習に出かけた教練などは思い出も深い。一般の学科では折口信夫、武田祐吉両先生の講義の御様子などが目に浮ぶ。そうした中で、どうしたわけか私は加藤玄智先生の宗教学に興味をひかれ、我ながら熱心に聴講したことを